

総合的な学習と水辺空間整備 「狛江水辺の楽校」の取り組み例

「狛江水辺の楽校」運営協議会 竹本 久志

はじめに 子供たちが見守る「ツクシ村」

先日、こんなことがあった。場所は多摩川中流域の左岸にある「狛江水辺の楽校」(下絵参照)。毎週のようにこのエリアの環境清掃に参加している2つの小学校児童が「見て、見て。こっちにもツクシ村ができてよ」と新発見。駆けつけてみると昨年より少し下流に小さなツクシの群落が生えている。

一人の男の子が「去年の台風で流されたからだ」と解説すれば、「ちがうよ。孢子が風で飛ばされてきたんだよ」と女の子。するともう一人が「地下茎が伸びたからじゃないの?」と意見三出。高学年とはいえ、自然の知識に長けたそれぞれの考えだ。地下茎が伸びたにしては距離がある。孢子説か土ごと移動説で決着をみたようだが、特筆しておきたいのは、子供たちの次の行動だ。

踏まれないようにと、拾い集めた枯れ枝を周りに突き差して注意をうながす囲いを作った。その横には「新しいツクシ村。みんなで見守ろう」という内容の小さな木札を立てている。

この子供たちのさりげない行為とやさしさ。自然を教科書にした、水辺の楽校で培われたものである。

河川整備も可能な「水辺の楽校」の全国的な広がり

「水辺の楽校」は、国土交通省が全国規模で進める、河川を子供たちの自然体験や自然学習の場として活用するプロジェクト計画である。平成14年3月現在、全国で213箇所。多摩川水系でも東京都と神奈川県4市にまたがる計8箇所が登録認可を受けている。なかには川崎市のように、分校も含め3つのエリアで活動を予定している自治体もあり、それぞれの河川環境や地域性を生かした独自の活動がなされている。

総合的な学習の本格導入にあたり、昨年7月東京ビッグサイトで行われた「全国総合的学習セミナー」でも、80%近い学校が環境学習の対象として河川に注目しているとのアンケート結果を寄せている。必要なら河川整備も行われる「水辺の楽校プロジェクト」は、今後ますます全国に広がるものと思われる。



「多摩川水系河川整備計画」をベースにした水辺環境整備

多摩川では平成13年3月、市民・自治体及び河川管理者が共に実踏や話し合いを重ね「多摩川水系河川整備計画」が策定された。官民が協力して作りあげた河川整備計画としては全国で2例目、関東地方では初である。

その中で狛江水辺の楽校エリアは「自然レクリエーション空間」「文教空間」「情操空間」の3つの機能をあわせ持つゾーンとして位置づけられている。

左頁のイラストは、昨年作成した「狛江水辺の楽校」の案内看板である。子供たちが見つけたツクシ村のある土手を下りると、湧水あり、小川あり、そして2つの自然池、これらを取り囲むタチヤナギやオニグルミの河川林に、広大なオギの草地。生態系も豊かで中下流域では珍しくなったニホンアカガエルやトウキョウダルマガエルが棲息し、数年前までは絶滅危惧種のホトケドジョウまでも見られた。

「狛江水辺の楽校」で、私たちが第一に考えたのもこうした自然環境の保護・保全である。準備委員会、推進協議会と輪を広げながら1年半におよぶ話し合いの中で様々な意見や要望が出されたが、最終的に整備は必要最少限にとどめることで一致した。

そのベースとなったのが、先の河川整備計画であり、今いる生きものたちの生存権を優先的に考慮しようという狛江ならではの発想である。

同エリアの主な整備は次の通りだ。アクセス路確保のための階段設置2ヶ所、高齢者や車椅子利用者のための緩傾斜坂路（スロープ）2ヶ所、2つの池に堆積した砂泥の浚渫及び砂利などの流下を緩和する柳枝盛土2ヶ所、湧水口の保全工事と小川の土砂崩れを防ぐ木杭敷設などである。

河川を活用した総合的な学習の支援と環境清掃

平成13年度、「狛江水辺の楽校」運営協議会が主催または支援した活動数は18回。参加人数は699名で、うち416名が生徒児童である。支援とは、地域の小中学校や流域の行事があった際にゲストティーチャーとして、あるいは補助スタッフとして参加したものをいう。

例えば昨年12月、地元の和泉小学校4年生78名による自然学習「樹木しらべ・化石しらべ」が行われた。運営協議会でも多摩川に詳しいメンバーが、先生方の補助や事故防止の安全スタッフとして参加協力。



木の高さや種類を調べた和泉小学校の冬の自然学習



夏の環境清掃は川の中へ。ビンやカンなどを拾い集めた後は川遊び

地元の学校の野外学習をサポートするようにしている。

逆に「春の七草観察会」や「水辺の生きもの調査」「夏休み昆虫観察会」、春秋に行う「水質検査」など、水辺の楽校が主催する活動には学校が生徒や保護者に参加を呼びかけている。運営協議会にはこうした学校の先生方も参画されており、市民と学校、行政とのパートナーシップによる運営がなされている。

平成10年、旧文部省は自然体験が少ない子供ほど道徳感や正義感が薄れていくという調査結果を発表した。今後、自然のなかで遊び学ぶ機会が増えるにつれ、子供たちの人格形成にも好ましい影響を与えるに違いない。

冒頭でも紹介したが、狛江では子供たちと市民による清掃活動がもう4年近く続いている。学校の教室を自分たちで掃除するように、水辺の楽校も利用するみんなできれいにしようという考えだ。

内容もゴミ拾いだけではない。ナマズやドジョウなど生きものたちのために湧水や小川の汚泥をすくいだしたり、流木で丸木橋を作ったり。こうした環境保全も含めた清掃を、私たちは環境清掃と呼んでいる。

大人たちにまじって自ら汗を流した子供たちは自然に対して強い愛着と関心を持つ。生きものたちへのいとしさもわいてくる。その良い例が、ツクシ村発見の児童たちだ。次なる環境清掃は、子供たちによる「メダカの楽校」復活掃除である。